



あごなし地蔵



金糞地蔵



子育地蔵



子授け地蔵



おついで地蔵



かんかん地蔵



笠地蔵

地蔵さま縁結び

あるとき爺さまやってきた
 おついで様にやってきた
 孫によい嫁探してと・・・
 あるとき婆さまやってきた
 おついで様にやってきた
 孫によい婿探してと・・・
 おついで地蔵はでかけたと
 夜更けにそつとでかけたと
 子授け地蔵に笠地蔵
 かんかん地蔵に金糞地蔵
 あごなし地蔵に子育地蔵
 とんとんみんな集まった
 八幡さまに集まった
 ふむふむこれこれこんな訳
 おついで地蔵はいったとき
 お地蔵たちはいったとき
 八幡様に聞くがいい
 八幡様はいったとき
 春の良き日に逢わせましょう
 二人はめでたく結ばれて
 元気な子供を授かった
 爺さま婆さま慶んだ
 お地蔵さまも慶んだ

◇散歩のみどころ

JR高尾駅の北口から高尾街道を蛇行しながら石神坂まで約6kmの行程で、平安後期から中世の終わり頃まで伝承伝説が残る散歩道である。

廿里の古戦場から多摩森林科学園、笠地蔵で有名な妙観寺へ。御霊谷川沿いにある権五郎伝説の神社から戻って、梶原景時が鎌倉鶴岡八幡宮を分祠勧請した八幡神社へ。この周辺は見どころの一つ。更に南へ高尾街道を横切り、鎌倉古道を歩き城山川へ。昔、刀匠の町だった鍛冶屋敷に出る。

金糞地蔵を拜んでから北へ、下原刀「市史跡武蔵太郎安國鍛刀之地」の碑を見る。高速道路を潜り、東へ古道を行くと山本家墓地内に出る。そこには安國の墓がある。ここも見どころの一つ。そして、お女郎塚と言われる石碑と桜の木を愛でてからまた高尾街道に戻る。おついで地蔵

にお参りして、今回の散歩を終わる。

八王子の由来と

華嚴菩薩妙行

北条氏照主従の墓地の前には、昔観音堂があった(元八王子町三丁目)。今は宗関寺(前身は牛頭山神護寺)で背後丘上に移された。この地を華嚴谷戸といい、土地の人はこれをゲーガヤトと呼んでいる。

延喜十三年(九一三)深沢山(八王子城、城山)山頂の岩屋で妙行が修業中、岩屋の上から一匹の大蛇が下りてきて、とぐろを巻いて眠ってしまった。此態に妙行「汝、何物なれば予の行を邪魔するぞ」醒よッー」と手に持っていた念珠でその頭を打つと大蛇の姿は忽然として消え去り、その処には八人の童子を携えた白髪童顔の神人が現れ「吾は牛頭天王、伴う者は五男三女の八王子である。之を祀らば永くこの地の守護神とならん」と告げ給うと見る間

にその姿は消えてしまった。

妙行は、告の如く祠を建て祀ったのが八王子権現の始まりである。延喜十六年(九一六)四月十五日妙行五十五歳の時であった。

天慶二年(九三九)、妙行の功績が都の朱雀天皇の耳に届き、「華嚴菩薩」の称号が贈られるとともに、寺名も「牛頭山神護寺」と改められ、後に八王子となった。

牛頭天王は、インドの釈迦の生誕地に因む祇園精舎の守護神とされ、神仏習合では薬師如来の垂迹であるとともに、スサノウの本地とされた。

除疫神として京都の八坂神社などに祀られている。頭上に牛の頭を持つ忿怒相に表わされる。



八王子城跡

① 廿里 古戦場

廿里町一

JR高尾駅から北に進み、「多摩森林科学園」に続く山や南浅川の川原一帯が古戦場であったといわれている。

「武蔵名所図会」によれば、「鳥取古戦場、今は十里と書くなり」とある。八王子市指定史跡の説明板を引用すると、永禄十二年（一五六九）十月一日、武田信玄の武将小山田信茂と北条氏照の重臣横地監物の軍団が激戦を交わしたところである。

この年信玄は、北条氏康の小田原城を攻め落とそうとして甲州を出発した。碓氷峠を越え武蔵の北条氏の諸城を次々と攻略しながら南下し、拠点の滝山城に迫り、そして拝島の大日堂に布陣する。一方の別働隊、小山田信茂は小仏峠を越えて滝山城へと軍を進めた。

急報により北条氏照の命を受けた

横地監物や中山勘解由、布施出羽守は、三百余騎と雑兵二千余の軍勢で鳥取山に向かった。しかし小山田勢は、既に陣構えを終え、兵を五手に分けて山上部から鉄砲や弓矢で攻めたて、後手になった北条勢はもろくも滝山城へ敗走した。小山田勢はこの戦いで、首級を二百五十一も挙げた。

「新編武蔵風土記稿」には、「合戦の時の頸塚なり。大きき二間四方、塚上に榎一株あり十里山の続きなり」と、供養塚について書かれている。

この合戦の狙いは、小田原城侵攻という本来の目的を達するために、別の出城を攻め、あたかもキツツキがくちばしで木をつつき、獲物をおびき出す戦法に似ていることから、「きつつき戦法」といわれた。

又、廿里とは、「秩父へ十里、鎌倉へも十里隔てるとの事に由来する」という説があるので、鎌倉古道が往還していた道と思われる。

「自然と史跡の探訪ガイド高尾駅界限」より



廿里古戦場跡



南浅川橋から見た廿里山

小山田武州八王子合戦之図



写真(廿里古戦場合戦の図)1
(八王子市文化財ガイドブックより)

②多摩森林科学園

廿里町

三多摩各市町村の「花と木」を見ると、八王子市は「山百合と銀否」、青梅市は「梅と杉」、府中市は「梅と櫟」をそれぞれ挙げているが、日本人に多く愛されている「桜」を指定している市町村は、小金井市（多摩市は山桜）ただ一市だけである。

ところで、八王子市においては、「花見といえば富士森公園の桜」とよくいわれてきたが、昭和四十年頃からは「高尾の林業試験場の桜」が「桜の名所」として広く市民の口の端に上がるようになった。桜の種類が多さと、花の下の散策が楽しめるからか。

かつての林業試験場は現在森林総合研究所の「多摩森林科学園」となっている。

「自然と史跡の探訪ガイド高尾駅界限」より

●多摩森林科学園の沿革

当園の場所は、四百年前、小田原北条氏と甲斐の武田氏が、熾烈を極める戦いを繰り広げた古戦場である。

八王子城落城後は江戸幕府直轄地と変わり、当時の代官江川太郎左衛門が植えたと伝わる「江川櫨」が残されている。

明治時代には宮内省管轄となり、

大正十年（一九二一）に帝室林野管理局林業試験場となった。戦後は農林省に移管、昭和三十二年（一九五七）林業試験場浅川実験林と改称、昭和六十三年（一九八八）には森林総合研究所の「多摩森林科学園」となった。広く市民や研究者等に公開し、森林環境教育の場として動植物の保全や生態系の研究などを進めながら、都市近郊の自然保護に努めている。

「自然と史跡の探訪ガイド高尾駅界限」より



森の科学館

③ 霊慶山慈根院妙観寺

元八王子町三丁目

宗派 真言宗智山派

本尊 不動明王

寺宝 笠地藏

開山 妙誉（寂年不明）

開創 応仁二年（一四六八）

開山は妙誉といわれ、その後天文

三年（一五三四）多門坊が中興し、

西明寺の円澄が文政十年（一八二七）

本堂を再建した。昭和十六年火災に

より本堂を焼失、戦時中の資材不足

の時節にもかかわらず、当山二十六

世範俊が再建。歳月を経て堂宇の傷

みが増した昭和六十年、当山二十九

世隆俊が再建立し、現在に至る。



齒吹如来

極楽寺（八王子市）
齒を見せて微笑みを
たたえている。

● 笠地藏

境内には、右から阿弥陀如来、釈

迦如来、地藏菩薩が安置されている。

此の地藏尊が笠地藏と呼ばれ、当山

先住法養房實圓法印が十万有縁の喜

拾を募り、弘化二年（一八四五）よ

り同五年にかけて造立。五重石塔も

嘉永五年（一八五二）十一月造立し

たものである。

實圓法印は武州多摩郡二分方村柳

沢の人で、天保十四年（一八四三）

十月には師岡忠助美寛鑄造の梵鐘を

作るなど、当寺の興隆に功あり、有

徳の住僧であった。安政二年（一八

五五）九月十日塔下に入寂と伝わる。

はぶき

● 齒吹如来

妙観寺は古くは明観寺とも称せら

れ、本尊は阿弥陀如来といわれてい

た。また旧本尊は八王子市大横町極

楽寺の「齒吹如来」といわれている。



笠地藏



妙観寺

④ 八王子薬師堂

この堂は薬師如来を安置しており、眼疾に靈験があり地元の信者などに尊崇されている。また、子供好きの薬師様としても知られている。

北条家臣だった平家一門の常盤小六郎平盛時が、永禄年間（一五五八～六九）この地に勧請したという。

以前は宮の前から中宿に通ずる道路の脇にあったが、中央高速道路関係の改修工事のため現在は東京霊園に移動安置されている。



旧 八王子薬師堂



新薬師堂内部



新 薬師堂(東京霊園)

⑤ カンカン地蔵

城山川と御霊谷川の合流から西へ少し行くと左側に地蔵二体と石灯籠が安置されている。左の地蔵は年代不明だが、左の舟型地蔵が「カンカン地蔵」といわれている。地蔵には、無数の穴傷が残っている。

古老の話によると、体の痛いところをとがった石で叩けば痛みが和らぐといわれ、その叩く音がカンカンとするのでこの名がついたという。

中央の座像には宝暦九年（一七五九）の銘が残っている。このカンカン地蔵は昔ばなしで有名である。



カンカン地蔵

⑥ 御霊明神社

元八王子三丁目

勸請 梶原景時

祭神 鎌倉権五郎景政

創建 建久年間（一一九〇～九九）

例祭 八月

御霊明神社は、梶原景時が八幡宮を勸請した時、共に勸請したといわれている。

景政は景時の遠祖で、景時の母は横山氏の出であり、このための縁故であるろうという。

景政は寛治元年（一一〇八七）九月三日僅か十六才で奥州征伐へ。途次金沢の柵で敵の矢が景政の右眼に刺さるが、怯むことなく敵陣へ討って出た猛将であった。

昔ばなしとして、御霊明神社の傍らを通れる川の魚は右眼がないとか、またクツワムシが騒がしく鳴いていて敵の接近に気がつかず、不覚にも眼を打ち貫かれたとか。その為景政がクツワムシを憎み、今でもこの近くにはクツ

ワムシがないなど、景政が崇拝されていた証か、いままなお伝説や昔ばなしとして残っている。



御霊谷川



御霊明神社



地藏尊



子授石

⑦八幡宮下の常盤塚

元八王子三丁目

「武蔵名所図会」に元八王子三丁目の常盤塚の事が数行記載されている。内容は「北条の臣、常盤小六郎平盛時というもの、天正十八年（一五九〇）六月二十三日に討死す。その身体を埋めたる塚なり。この人は相州下川尻（相模原市）の辺りに住せしと云。子孫民間に入り、この地も荒廢の野となりしかば、文祿（一五九二〜九六）の頃ここに子孫移住すと云。」との記載である。

常盤家の十四代目、常盤聖一氏は、「子供の頃、祖父泰造が作物を作るため、塚を削り平らにしたが遺骨などは出なかつたと聞かされていた」といい、塚の高さ、長さなどは解らない。「雨が降ったあと庭にでると古銭がよく出ていた。塚を壊した時、土の中にあつたものだろう、現在も七十個以上の小銭を保管しているが朝鮮のものと思われる小銭が多い。」

現在、塚の有った場所には、祖父の手で造られた墓石が立てられている。墓石の内容は祖先の墓として、天正十八年（一五九〇）六月に討死した初代と二代の墓石として、三方向（西・南・北）からお参りできるかたちで普通の墓石とは違う。」

歴史好きの主人は続けて、「この付近は（常盤家の敷地）鎌倉古道で、塚というより道しるべの石碑や旅の安全などを願う祠などが、土を高く盛り上げたところにあつたものではないか」とも語った。又、「常盤家は信州（長野県）の常盤邑から出てきたというが、四家の常盤系図とは合わないところもあり、いつの時代に千人同心に加つたのか、それもこれからの研究課題」と話していた。



【墓石戒名】
元祖は正面 廓口不味居士之墓
二代は右側面 湛涼定池禅尼
三代は左側面 白室妙雲大姉



韓国銭



三面拝墓（常盤塚）

⑧ 八幡神社

元八王子三丁目

勧請 梶原景時

祭神 應神天皇

社宝 梶原景時勧請の棟札等多数・

鏝口・青銅製横書扁額「八王

子」宝永二年（一七〇五）

創建 建久二年（一一九一）

例祭 四月第三日曜日

この八幡神社は、旧郷社梶原八幡宮ともいい、景時が鎌倉の鶴岡八幡宮の旧神像（甲冑馬上木像）を源頼朝より拝領し、所領のこの地に勧請したという。

社伝によると寛政四年（一四六三）十月に梶原家景、文明十七年（一四八五）十月梶原賢孝がそれぞれ社殿を再建している。

天正十九年（一五九一）十一月、北条氏照より社領十石の朱印を与えられ、往事は真言宗西明寺の管理下にあたった。

「新編武蔵風土記稿」によると、鐘楼、阿弥陀堂、四座合殿社があった。現在は明神社、天神社、稻荷社、機神社、荒神社の末社がある。

また、天正十六年（一五八八）五月二十八日多西郡由井領横川八幡宮と記す鏝口があり、古くは当地が横川村に属していたか、横川八幡宮の鏝口が当地に移ったのではないかともいわれている。



八幡神社鳥居



御朱印



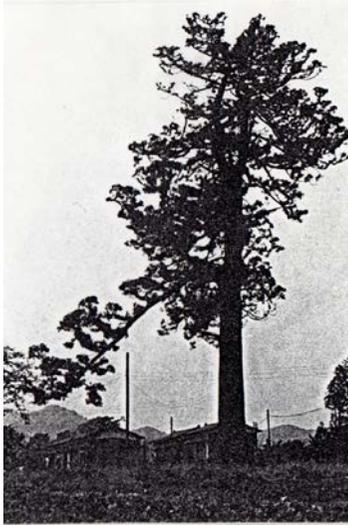
八幡神社

● 神木梶原杉

八幡神社参道に、建久二年（一一九一）梶原景時が源頼朝の命により、鎌倉鶴岡八幡宮をこの地に勧請した時に植えたと伝えられている。

高さ三十m、目通り幹囲十二mの巨木で、都内随一の大杉といわれ、樹齢約八百年。この梶原杉は明治と昭和に二度の火災にあっている。

地上から十m位の枝が下向きに垂れていることから、「逆さ杉」ともいわれ、景時が土にさした枝から芽を吹いてきたという伝説もある。



以前の梶原杉

長い間神木として崇敬されていたが、昭和四十七年枯死。現在根株の部分を保存。輪切りの一部は稲山小学校（廃校）に一時保存されていた。昭和三年（一九二八）三月の東京府標識天然記念物に指定されていた



現在の梶原杉の切株



復元された灯籠

● 常夜燈

八幡神社境内に最近復元された大きな灯籠がある。これは元八王子一丁目の通称出口の道路中央に、大正四年（一九一五）十一月御大典を記念して地元の人達によつて建立された。

この灯籠は、八王子神社や八幡神社の御神燈であり、道標も兼ねていたが、道路拡幅により何度か移転し現在に至っている。

灯籠には

八王子神社 氏子中

恩方川口方面 八王子横山村方面

恩方浅川方面 大正四年十一月

と記されている。



以前の元八王子一丁目の灯籠

⑨ 慈根寺・西明寺跡

元八王子三丁目

元八王子の八幡宮領域北に、修験道と思われる慈根寺という寺があったことが八幡宮の棟札から見られる。創建年次は不明だが、正暦年間(九九〇～九九五)以前とみられている。又、建久二年(一一九二)梶原景時により八幡宮を勧請し、その時に別当寺となり、この頃に邑(村)の地名が慈根寺村と改められたといわれている。

慈根寺村に儀海という名僧が現れ、嘉元三年(一一三〇五)から応長元年(一一三一一)にかけて、慈根寺に住して経文を書写している記録がある。その後慈根寺は鎌倉時代末期(一一三〇〇)頃衰退したが、西明寺として再建され、明治初年まで続いた後、廃仏希釈で廃寺となった。

そして、昭和四十年代始め、高速道路建設により廃寺跡も完全に消えた。



慈根寺跡・西明神跡

⑩ 神道墓地

元八王子三丁目

元八王子の八幡宮の裏に中央高速道路が通っている。道路上に架けられた橋を渡って、八王子唯一の神道墓地に入る。

八幡宮の墓地は神職の梶原氏の墓地で、地域の神道の家族が眠っている。神道では焼香は行わないので香炉は無く、玉串を捧げる「八足台」が

ある。

墓石は細長の角柱型で三種の神器の一つの天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)を表しており、頂上部は「四角錐」となっている。

神道には戒名は無く、墓石に「○家之奥津城(おくつき)」と刻まれるか、又は奥城(おくき)とも刻まれる。墓標には、成人男性の場合は「○○大人(うし) 命之奥津城」、成人女性の場合は「○○刀自(とじ) 命之奥津城」と黒墨で書かれる。

戒名が無いので姓名の下に「之霊」「命」「命霊」「霊位」の霊璽(れいじ)がつけられる。

成人大人(うし)以外は「若子(わかこ)」「童子(わらこ)」「郎子(いらっこ)」「彦」「老叟(おおおきな)」「翁」「大君」「命」「尊」と付けられる。

成人刀自(とじ)以外は「童女(わらめ)」「郎女(いらつめ)」「大刀自」「媼(おおな)」「大媼」「姫」「媛」と付けられる。また死亡年齢や業績に応じた呼称が贈られる事もある。

奥都城（奥津城）の「奥」は奥深い意の奥や、置くを意味する。

「都」・「津」は上代の格助詞「つ」に当てた万葉仮名で、「つ」の意。

「都」は神官・氏子などを勤めた人の墓に使われる。

「津」は一般信徒の墓に使われる。又、先祖に神官・氏子の役に従事した人がいる場合は「都」が使われる事もある。

「城」は柵・壁など四辺を取り囲んだ一郭の場所を表す意味で、一般に柵を置く場所といわれる。

お参りは、焼香や線香は用いず。榊や枝に紙垂をつけた玉串を奉奠する。榊・米・塩・水・酒や故人が生前に好んだ食べ物や花などを捧げる。



神道墓

⑪ 陵域内に残る

鎌倉古道と太夫坂

多摩・武蔵御陵内

元八王子三丁目の八幡神社前から高尾街道を挟んで南に城山川が流れ、八王子城全盛時代には、南八日市と呼ばれ遊女街があった。その街の中を鎌倉古道が通じていた。城山川を渡り、中郷（長房町）の石平道人遺跡麓（現在御陵の中）を通り、御陵広場を出て南浅川を渡り、そして鎌倉方面に向かっていた。

太夫坂とは、「武蔵名勝図会」の長房村の項に、「元八王子村八幡森の前へ出る相州（鎌倉）古道あり、太夫坂という坂があり習合神道を業として古くこの村に住む者の辺の坂ゆえ、斯くは号をす由。この辺に四軒あり」とある。元八王子村の項には「・・当所の八幡宮の下の方へ出て、それより八幡宮の社地より西の方を通り隣村の川村の西へかかり、下恩方の河原

宿に出る道なり。」とあり鎌倉古道に関する記録がある。

又、元八王子側では、坂の下り口に遊女街があったからともいわれるが、当時遊女を太夫と呼んだ記録は無い。現在太夫坂は陵域内にあり、フェンスに囲まれて廃道となっている。

「多摩のあゆみ」第五号に羽鳥英一氏著書の「八王子付近の戦国古道」という本の一文がある。「太夫坂は現在多摩御陵内を通っているので通行はできないが、谷を埋、山を切り約二mから三m幅の整然とした道で、坂の下に馬頭尊があった」とある。

現在、橋は無くなり対岸に渡る事も出来ず、フェンスに囲まれた中は、雑草や雑木に埋もれ古道はおろか馬頭尊さえも見えない。



馬頭尊



鎌倉古道



城山川

⑫ 金糞地蔵

かなくそ

高尾街道に「金糞地蔵」が北向きに鎮座している。

この金糞とは、刀を造る時に鉄鉾石や砂鉄から良質な鉄を摂り出すが、そのときに不純物が混じった鉄も出る。良質鉄の下に澱んだ鉄を金糞（くず、くずてつ、なまこ）と呼んだ。

刀鍛冶は神道に通ずるため、名刀を造る過程で、出る不純物があちこちで捨てられるのは「神様の罰」が当たるといふ事から、廃棄の場所を決めて、その近くに地蔵様を建てた。その供養地蔵のことを金糞地蔵という。

戦中戦後わが国で鉄が不足していた頃、金糞を拾い集める人もいた。ところで日本刀に縁のある言葉で、私たちが普段なにげなく使っている言葉が沢山ある。

代表的なのを幾つか挙げる。切羽つまる、鑄を削る、土壇場、目貫通り、快刀乱麻を断つ、鏝ぜり合い、鞘当て、つけ焼刃など。



金糞蔵尊



庚申塔

⑬ 鍛冶屋敷の辺り

元八王子三丁目

元八王子高尾街道の「宮の前」から東へ、石神坂、四谷方面に向かうと「鍛冶屋敷」のバス停がある。すぐ先には高速自動車道路が通る。かつて「横山原」と呼ばれていた平坦な台地があつて、そこを南北にこの自動車道路が両断している。住宅開発や道路計画の進展に伴つて、この辺りの田園風景はすっかり変わった。

今では八幡神社の森や、八王子城跡の山頂部も場所により見えなくなつた。この辺の東南方向が「南八日市」で、高速道路のガードをくぐつて東北方向の辺りが「八幡宿」だった所である。この宿の北側、山沿いに秋葉神社が鎮座しているが、周辺に「総構え」と称する土手が一部残っている。ここは八王子城第一の関門とされ、戦略上の要地だった様子がかがわれる。尚、この「横山、八日市、八幡」の各宿名が、落城と

共に三宿の宿替えとなり、現在の市街地の町名にそのまま残されている。全国的にも珍しいケースである。

さて、戦国期の城下町の一角に、鍛冶屋敷と呼ばれた刀匠の町が栄えていた。この場所は「鍛冶屋敷バス停」の北裏通り一帯と推定されている。また近くには「市史蹟武蔵太郎安國鍛刀之地」の碑が建てられている。

武州「下原鍛冶」は、永正（一五〇四）から大永（一五二七）の頃、周重と名のる刀工の集団で、下恩方町の字下原や、横川町（下原）、元八王子町の字鍛冶屋敷辺に居住し、天正四年（一五七六）には北条氏照の庇護をうけていた事が知られている。一族は代々山本性を名乗り、下原の伝法やその技術を門外不出とし、著名な刀工を多く生み出してきた。「下原住」の銘と刀工名を刀に刻み、武用刀として優れた刀と伝えている。一門の中で「安国」は、水戸光圀の槍を鍛え、名を賜つたと伝わっている。

又、吉宗の時代、上覧鍛冶を行ったとの記録も残っている。「自然と史跡の探訪ガイド高尾駅界限」より



市史跡刀匠武蔵太郎
安國鍛刀之地



刀匠



鍛冶屋敷バス停



武蔵太郎安國の墓



山本家の墓



⑭ あごなし地蔵

元八王子町二丁目の高尾街道沿いでは、変わった名を持つ地蔵尊をいくつか見掛ける。「金糞地蔵」や「おついで地蔵」などがそれである。

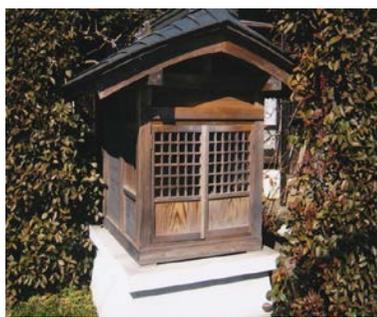
その内の一つに、「あごなし地蔵」と呼ばれる地蔵尊がある。バス停「鍛冶屋敷前」の近くに立つその地蔵尊は、その名に反してあごはきちんと付いている。お参りすると歯が強くなるといわれ、近郷近在からも願掛けにくるといふ。

この地蔵さまは、地蔵尊を守っている山本家の先祖が建てたそうだ。明治の半ば頃、孫の歯が弱いことを心配していた祖父の夢まくらに、地蔵さまが立ち「私を祀りなさい、そうすれば歯が強くなる」と告げたとか。そこで祖父は南に旅に出て、三日後に夢まくらに立ったのとそっくりの一体の地蔵さまを見つけ、担いで帰ってきて祀ったとされる。元々は、自分の子どものために建

てた地蔵尊だったが、やがて歯痛で困っている人や、子どもの歯やあごを強くしたいと願う親たちもお参りに来るようになった。いつしか「あごなし地蔵」と呼ばれるようになったが、その名の由来は定かではない。



あごなし地蔵尊



あごなし地蔵尊の祠

⑮ お女郎塚と

おさるの木

滝山城主北条氏照は、この城が鉄砲の攻撃に耐えられないと判断し、天正年間に八王子城への移転を決行した。この時、大善寺、極楽寺などの寺院や滝山城下で栄えた横山、八日市、八幡の三宿も共に元八王子に移った。

現在の元八王子町二丁目、石神坂を登ったあたりが横山原といい、八王子城下横山宿の跡と考えられる。高台に桜の巨木がそびえていたが、その付近に大善寺、極楽寺の両寺があったとも伝えられている。その横山原を通り抜ける道路の南側に「お女郎塚」と呼ばれる塚があった。二つ三坪のものだったというがその名は八王子城下に生活した女郎たちを思い浮かべせる。

昭和初期の新聞に、お女郎塚発掘記事が載ったことがある。

天正の昔、遊女と武士の恋を書き

たてたものらしいが、その内容は疑わしい。裏宿（横山原の西）で生まれ育ったという古老も、発掘の話は知っていたが、塚とお女郎たちとの関係は聞いたことがないと語った。お女郎塚は、その上を覆うルツボ草の球根が松露に似ているところから「お松露塚」と呼ばれ、それがなまったものという説もある。

また、桜の木辺りに塚があり、里人はこの塚を「傾城塚」又は「お女郎塚」と呼び、八王子城落城の時、寄手が逃げ遅れた遊女達を切り捨てたので、哀れに思い供養のために造ったという説もある。

一方、以前この場所を発掘調査したところ石器や土器がたくさん出土し、辺り一帯は石器時代の包蔵地であったともいわれ、耕作のじやまになるものをここに集めたことから、塚になつてしまったともいい、それが城山話に結びついたのではないかと。

桜の木は昔から「おさるの木」と呼ばれているが、これは多分その根

元にある享保五年（一七二〇）十月銘のある庚申塔からきているものと考えられる。

庚申塔は青面金剛像で、合掌六手の笠付日月一鬼三猿が彫られている像高四〇cmの石像である。隣に天保三年（一八三二）秋葉山大権現鎮守御宝前、中郷講中と彫られた火袋部分の欠陥した灯籠の台と思われる石造物もある。

「おさるの木」の北側は、急に地盤が下がっていて、この辺は「道場根」という字名がある。昔、剣聖の神宮寺伊豆守が、ここに道場を開いていたことからこの名があるといわれている。

「元八王子の歴史散歩資料・小山祐三著」より





お女郎塚 (傾城塚)



おさるの木 (桜の木)

⑩ おついで地蔵

元八王子二丁目

元八王子町の石神坂南側歩道部分に「おついで地蔵」が祀られている。石神坂は東の八幡宿と西の横山原との境で、八王子城のあったころ坂上は横山口といい、城戸があったところ。むかしは石神坂と呼んでいた。

一説によると、北条氏の重臣に石上新右衛門道善の屋敷があったので、その名がつけられたともいわれている。

祠は坂の下の旧道との分かれ道の所にあつたが、現在地には平成十九年（二〇〇七）九月に移転した。

祠の中に祀られている地蔵は、元禄三年（一六九〇）四月銘のある舟型立像で、像高八三cm、八幡宿念仏講の人が建立したもの。わざわざ祈願にこなくてもよく、どこかへ行く途中、ついでにお参り祈願すると諸願成就するという変わった地蔵といわれている。

「横山口」は八王子城の第一関門で

あつた所で、総構えの土手があつた。

古戦記に「一万五千余の軍兵亥の刻（夜中の二時）横山に到り黎明に横山口の城戸を破るといへども城までは遙かに遠きゆゑこれを知らず守兵少なくて易々と之を破る云々」とある。

〔元八王子の歴史散歩資料・小山祐三著〕より



おついで地蔵の祠



おついで地蔵



石神坂バス停

● 参考資料

- ・ 武蔵名所図会
- ・ 八王子寺院めぐり
- ・ 八王子郷土資料館資料
- ・ 元八王子の歴史散歩資料
小山祐三著
- ・ 自然と史跡の探訪ガイド
高尾駅界限
- ・ 八王子市史
- ・ 八王子事典
- ・ 新編武蔵風土記稿
- ・ 凶説・歴史散歩事典
- ・ 元八王子の歴史 井上孝太郎著
- ・ 植物で見る万葉の世界
- ・ 八王子市地図
- ・ 八王子市観光マップ
- ・ 昭文社